

## 花王教員フェローシップ

私がこのプロジェクトで学んだこと  
～生徒にどのように体験を話すか～

Dolphins and Whales of Moray Firth

大田区立貝塚中学校

江濱悦子



### 1. イルカとの初めての出会い

今まで野生のイルカを見た事がなかった。同じボートに乗っていたエマが、“dolphins!”と叫んだとき、みんなでいっせいに叫び声のほうを見た。お母さんイルカにぴったりとくっついて泳ぐかわいい赤ちゃんイルカ、まだ体にしましまがついていた。生後1年以内だということだった。「なんて美しいのだろう。」しばらく言葉がでなかった。青い海に負けないくらいキレイな色のイルカたち。ときおり見えるイルカの目のなんと優しいこと！イルカを見ていると心が穏やかになり、癒されている自分に気づいた。

それからすぐに、イルカはこの2匹だけではないことを知った。“How many dolphins?” イルカの数を数えた。なんどもなんども数えた。「5匹?6匹?・・・」この日の私たちのボートのチームリーダーであるニーナが、“more than ten!”と叫んだときには体が震えた。「そんなにいるの？」驚きと感動でイルカたちに釘付けだった。

どこまでも続くスコットランドの海原でたくさんのイルカにあったときのこの感動、言葉では言い尽くせない。自分が自然の一部であることを心で感じる事ができた。



大自然の中で見た、イルカ。



お母さんと子供のイルカ。何十枚と撮った写真の、私のベストショット。

### 2. チームワークの大切さ

“We are on the same boat.” いったん同じボートに乗れば、運命共同体。お互いがお互いを助け合うのは当たり前。チームのリーダーであるケビンはいつも私たちにこういって

いた。この掛け声のおかげで、“Are you OK?” “Are you all right?” いつもお互いに気持ちを確認しあうことができた。この感覚がとても心地よかった。ケ빈は、乗組員がベストの状況で海に出ることができるよう、常に他の人に気を配っていた。又、ボートの管理、天気なども常にチェックしていた。現地のスタッフもケ빈を中心にして、彼の仕事がやりやすいように動いていた。方法の違いで、たまに意見が衝突する事があっても最終目的はひとつ。イルカ、クジラの保全に向けて、協力し、できる限りの事をしよう、というスタッフのチームワークは抜群だった。この様子を見て、ボランティアである私たちもお客さん感覚ではなく、自分にできることは積極的にやろう、という姿勢を持つ事ができた。現地のスタッフの仕事へかける情熱を見て、自分が好きなことに一生を懸けることのかっこよさを実感した。

このプロジェクトに参加し、イルカとクジラについてのたくさんの専門的なことを知った。リーダーのケ빈はボートの上からイルカを見て、そのイルカの名前を言えるほどこの辺りを熟知していた。ケ빈とボートに乗っていると、様々な疑問が湧き、彼に質問することですぐにその答えが分かった。専門家のすごさを実感した。

チームのリーダー次第でその組織は変わる。このチームワークを見て、この言葉を思い出した。私自身、学級の経営者として子供たちが常に成長できる環境を作っているか？すごく反省した。



船の上でのひとこま。左から、ハナ、エミリー、ケ빈、ヘレン



ボートは、キートスとオーカIIがあり、2つのチームにわかれ、乗り込んだ。

### 3. バランス

12日間の生活は、イギリス人、アメリカ人、ドイツ人、イタリア人、日本人との共同生活であった。たくさん会話をした中で、私が気になった言葉は、この「バランス」という言葉。時折考えさせられる話題の時、みんなの口から出てきたので、すごく耳に残っている。

ある日お店に入って買い物をしていると、店員さんの動きが何やらそわそわしている。気がつくとお店のほとんどの電気が消えていた。「え？閉店？もう？まだ、5時20分でしょう？」お店の人の表情を見ると、いかにも「出て行ってください。」という感じ。日本じ

ゃ、ありえない。5時30分閉店のときは、5時30分にはこの店は完全に閉まるのね・・・

スコットランドではほとんどのお店がだいたい5時30分には閉まる。田舎だけではなく、スコットランド第3の都市、アバティーンでも同じだった。そのあと、「家族団らんで夕食でもとるのだろう、なんて豊かな暮らしだろう」、とうらやましくなった。「働くこと」はあくまでも「人生」の一部、仕事と自分の時間のバランスが大切だよ、とさりりといったイギリス人のリチャードの言葉を思い出した。

ある日、ポートから帰ってきた私たちに大ニュースが舞い込んできた。Fraserburgh 港にミンククジラが迷い込み、大騒動になっているという事だ。私たちはすぐに準備をして30分ほど離れた港に。すでに人だかりができていた。周りを見ると、ミンククジラの周りには大きな漁船がいっぱい。漁船が出入りするときにクジラとぶつくと大変な事に。それからどうにかしてクジラを海に返そうと、みんなで智恵を出し合ったがなかなかクジラは海へ帰ろうとしなかった。

2日目にはたくさんの放送局がやってきていた。フリティッシュダイバーと私たちのボランティア組織、CRRU がタッグを組んで救出に。救出の仕方は、クジラを小型船で囲み、音を立て、びっくりしたクジラを海のほうへ追いやろう、という作戦だった。うまくいく事を願って、何回も何回もトライした。この作戦は私たちが2日間現場にいる間、何度も行われ、いずれも失敗だった。3日目はフリティッシュダイバーに任せよう、という事でCRRUは港へ向かわなかったが、ついに成功した、という情報を得て、みんなで大喜びをした。

この事件でニーナがふとつぶやいた言葉を思い出す。「こんなにたくさんの方が自分の時間を使って一匹のクジラを助けるためにエネルギーを割いている。一方では、たくさんのクジラがいっぺんに殺されている。バランスが大事だよ・・・」



フリティッシュダイバーを囲むテレビ局。たくさんの報道陣が集まっていた。私たちも、翌日の新聞の写真に！

港に迷い込んだ、ミンククジラ。周りには、大きな漁船がいっぱい。

#### 4. 大自然の中で

自然の中にいると癒される。羊が幸せそうにえさを食べているのを観察したり、鳥が気持ちよく大空を羽ばたいているのを何時間も楽しんだり・・・。スコットランドでは、

一日の時間がとてもゆったりと流れていた。スコットランドの自然は本当にすごい。見渡すばかりの緑。そして青い海。様々なかわいらしい表情の野生の動物。東京での生活がうそのようだった。スコットランドに行って、自分が4年前に東京に出てきてから、鳥を見て美しいと感じたり、草花に目をやったりする余裕がなかったことを改めて感じた。

長崎の田舎に生まれ育った私にとって、いつも自然は自分の一部だった。祖父母は農家であったので、小さい頃から祖父母の畑によく足を運んでいた。特に小学校の帰り道は私にとって有意義な時間だった。友達と草花の蜜をすったり、木陰で休んだり、草花で首飾りを作ったり、ゆっくりと時間をかけて帰宅していた。

一方で、自然の恐さも体験した。それは雲仙普賢岳の噴火である。高校時には、ヘルメットとゴーグルを持参しての登校。知らず知らずのうちに自然の寛大さと人間の力では到底太刀打ちできない自然の恐怖を感じる事ができたと思う。一方で、今の子供たちは確実に自然と触れ合う機会が減っている。

自然環境は大切だ、環境教育は大事だ、頭ではわかっているでもその人自身が実際に自然にふれあい、自然を愛する気持ちが滞かなければなかなか難しい問題ではないか、と思う。そういう意味で子供たちがもっともっと自然と触れ合う機会をもてるようにするのも大人の責任ではないか。教師として、子供達と自然をもっと近づけるために、私自身も具体的には、咲いている植物の話とか、気候の話など、教室の中に自然の話題をこれまで以上に入れていきたいと思う。



草を食べ続ける羊。大草原の中で、のびのびと生活していた。



「ガーネット」と呼ばれる鳥。何千羽もいた。1匹1匹表情が違っていて観察するのが楽しかった。

## 5. 国際交流

現地に到着するのに、様々なドラマがあった。たくさんのスコットランドの人が私たちのことを手伝ってくれた。バス停がわからなかった時、親切にバス停までスーツケースを持ってくれ、教えてくれた人。バスの中で降りるバス停がわからなかったとき、たくさんの人が心配してくれた事。自分が知らない土地で困っている時に受ける親切は本当に骨身にしみるものである。そして、私自身も、日本で外国の人が困っていたら、進んで助けあげようと思った。

今回私たちが参加した事で、一番難しい点は、クジラとイルカを保全している組織に、クジラを捕獲している日本人が参加するという点、である。私は、あらかじめ最初の自己紹介で、自分の生まれ故郷、長崎の話をした。長崎にはかつてたくさんの捕鯨船があったこと。長崎には「おくんち」というお祭りがあり、そのお祭りに、「奉納踊り」というのがあること。その一つに、「クジラの潮吹き」をする町があること。クジラは私たちの先祖にとって、生活の一部であったこと。私たちの先祖はむやみにとったわけではなく、自然への感謝、クジラへの感謝を決して忘れていなかったこと。

他のみんなは大変興味があったらしく、とても静かに話を聞き、私自身が「どれくらいクジラを食べているのか。」「クジラの値段はどれくらいか。」などのたくさんの質問がかえってきた。最後にイギリス人のハナがこういった。「国際間の政治的な問題がいろいろあるのは事実である。自分の国が自分の国の利益を守ろうとすることは当たり前である。しかし、政治には関係なく、国民レベルでお互いにこのような話ができれば、変な誤解もなくなり、相互理解がより深まるね。」

お互いの文化を尊重しながら、生活レベルでそれぞれの国の人間が自分の国の現状を話す。そして、いろいろな違った視点からアイディアを出し合う。「そういう考えもあるのね。」「それ面白いね。」と自分の視野を広げる事ができることほど、話をしていて面白い事はない。今、私が英語を教えている生徒達すべてが将来このような経験ができるように、と思いながら毎日授業をしている。



ビーチピクニックに行った日。

みんなで海辺でリラックス。

## 6. JAPAN

スコットランドに行くことが決まったときから、訪れたいところがあった。それは、トーマス・グラバーの生家である。長崎にはグラバー園があり、彼の功績はよく知っていたが、彼がどのようなところで生まれ育ったのかを知りたかった。イギリス人は開拓精神が旺盛で、たくさんの方が、様々な国に貢献した。アバティーンにある博物館でたくさんの彼らの功績を見て驚いた。

そこには、日本の空気が流れていた。たくさんの日本のデコレーションがあり、スコッ



夜に行った、ダンスパーティ。

みんな、はしゃぎすぎ。。。。。

トランドで見る日本の文化は、本当に誇らしかった。「これが私たちの文化よ。」と叫びたくなった。自国を思う気持ちは外から強請されるものではなく、うちからわき出るものである。現地で説明をしてくれた男の子も、日本の歴史にすごく興味があるようであった。もっともっと日本の個性的な文化が世界に広がればいいな、と思う。グラバー邸では、イギリス人のエマがたくさん質問してきた。もっと、日本の歴史や文化の意味を知り、外国の人にわかりやすく説明できれば・・・。



注 スコットランドです。 長崎のグラバー園の模型。 日本のよろい。  
日本では、ありません。 懐かしくて。うれしくなった。 かっこよかったです。

## 7. 研修

私がこのプロジェクトに参加した一つの理由は、「未知の世界」への挑戦であった。新しい時代を切り開く未来を生きる生徒たちと接するには、まず教師自身がパイオニアの精神を持って何事にもチャレンジする事が重要だと思うからである。

実際、このプロジェクトに参加させていただき、多くの事を学ぶことができた。本当に感謝している。日頃休みがとれないので、日程的にはもちろんであるが、気持ちでも余裕のある夏休みにこのような経験をさせていただき、私自身「この経験をもとに2学期も頑張ろう」という前向きな気持ちを持てたことが、本当にうれしかった。



CRRU の本部がある通り。



滞在した場所の高台より。いつまで眺めても

飽きることがない風景。

#### 8. さいごに、このプロジェクトに参加して

このプロジェクトを通して、以上のように様々なことを学んだが、一番参加して良かったな、と思ったことは、「旅行」では得ることができない、かけがえのない「経験」をすることができたことだ。教師にはいろいろな「経験」が大切である。生徒に知識を教えることは、本当に簡単なことで、その気になれば教師がいなくても生徒は知識を本やインターネットで調べることができる。

しかし、自分が経験して思ったこと、感じたことをじかに伝えることは、その教師の「オリジナル」なものであり、生徒の心に訴えることができる。いかに生徒の「心を動かす」話ができるかが、教師の腕の見せ所であり、私たちの仕事の楽しみの一つではないかと考える。そういう意味でこのプロジェクトは本当に意義がある。これからも沢山の先生方にこのプロジェクトを知っていただき、参加してもらって、お互いに感じたことを共有できたら、と思う。

アースウォッチジャパンの方々、とくに細かい質問にもすぐに答えてくださった心強い加藤さん、このプロジェクトに教師が参加しやすいように考えて下さり、多大なるご支援を頂いた、花王株式会社の方々、このすばらしいプロジェクトを支えてくださっている全ての方に感謝します。そして、スコットランドでの私のすばらしいチームメイト、一緒に日本から参加した、渡邊先生、参加を快く許してくださった貝塚中学校の先生方、そして主人に感謝します。

最後に、自然の偉大さに感謝し、自分がその一部になれたことを感謝します。又、教師としてこの豊かな自然が永遠であるように子供達に伝えていく責任を感じます。